●タイ留学僧現地レポート

タイ・サンガにおける雨安居について

田中智誠

立命館大学経営学部卒業。
宇治黄檗山禅堂に掛錫、後、
滋賀県正瑞寺に入寺。
昭和24年鳥取県生まれ。

今年度の雨安居は八月一日（太陰暦第八満月の翌日）より十月二十八日の満月日までであります。その期間をタイでは〝パンサー〟と呼んでいます。入制日にあたる八月一日をワン・オーク・パンサーと言います。

タイにおける二十代の青年男子にとってはこの三ヵ月間のパンサーをはさんでの出家修行がもっとも理想とされております。したがってカオ・パンサーが近くなりますとバンコク市内では、得度式へむかう長蛇の行列がよく見うけられます。ドラやタイコを使っての大変にぎやかなもので、台座に乗せられた得度予定者の姿を端から見ていますと出家修行は男子にとって、一世一代の盛儀と言いますか、〝男の花道〟なのかなという感じがするほどです。

こうして誕生したピク・ナワカ（パーリ語で新比丘の意、雨安居未経験者をさす。）によってパンサー中の比丘数はそれ以外の平均数の約二倍になるようです。一九八〇年十二月末のタイ文部省宗教局統計資料によりますと、同年度パンサー中比丘安居者数は三十五万

七千四十八名、パンサー外は十四万六千七百十三名です。また二〇歳未満の沙弥ではパンサー中が十五万二千百十名、パンサー外では八万四千五百四十八名です。因みにワット（寺院）数は三万百七十九ヶ寺です。（同年度総人口は四千六百九十六万千三百三十八人のうち仏教を信奉するものが九五・四二％の四千四百七十二万五千九百七十九人、回教徒が四・〇二％の百八十八万七千八百四十六人です。またタイ国には大乗仏教に属する中国系寺院が十八ヶ寺にベトナム系が十三ヶ寺あります。）

ワット・パクナムにおいては八月一日の午後、パーリエン（パーリ語国家試験）段位とパンサー経験年数ならびに得度順位にもとづいて本堂に整列して坐り、略式晩課ののちパンサー期間中三ヵ月止住の誓願文を唱えます。当寺院本年度雨安居結制比丘数は約四百名で、沙弥は八十四名です。この寺には沙弥のための仏教学院が併設されておりますが、学校が夏休みとなる四月に沙弥の一時的出家が多いようです。（パンサーはパーリ語のワッサワーサからきているようですが、こちらでよく〝ルンピー・ブアッキィーパンサー・レーオ？〟と聞かれます。これはパンサーをいくら過ごしたかという意味から転じて〝貴僧の日本での法臘は何年ですか？〟という意味です。日本の禅道場では慣例的に入制中の三ヵ月を結制把住期間として修行者の行脚・転錫を禁じております。それと同様にパンサー中は原則的に行脚・外泊が出来ません。パンサーが明けますと制限がとかれますので一時または暫時の間もう少し己事究明をとか山寺で瞑想修行をと思う人以外、所期の目的を果した一時僧たちはどんどん還俗していきます。）

パンサー修行の主人公たるピク・ナワカにとっての日課はまず朝四時にベルが鳴りますが、大勢の寝起きしている都合上三時半には起床となります。それから衣帯を整えて（こちらの正式出頭の着衣で）四時半本堂に着座、四時四十五分～五時四十五分（法話とスワット・モン＝お経の練習）、六時～六時二十五分（粥

座)、六時半〜七時(朝課)、八時〜十時(教理・教法の講義)、十一時〜十二時(斎座)、十四時〜十六時(講義)、十七時〜十八時(晩課)、十八時〜十九時半(瞑想)というのがあらましです。

一時的出家僧が大部分を占るピク・ナワカにとって集中的修行期間であるパンサーは、実践的修行をとうしての法の体得にあると言えます。それはまた彼らの還俗後の新生活においても重要な意味を持ってくるものと言えます。

個人や家庭生活から社会一般にいたるまで仏教やバラモン教的色彩の儀式に始って儀式に終わるのがタイ国の伝統の一つです。得度式より還俗にいたるまでの一連の手続きは一生涯に一区画を呈する最大通過儀礼と言えます。得度式が大々的にオープニング・セレモニーとして形式を飾るものであるならば、パンサー修行はメイン・イヴェントとして内容の充実を計るものと言えましょう。

還俗後の彼らは各々の生活に戻り、やがては国家社会を支える一員となる人たちです。還俗にあたっての彼らの所得たるや如何るものかは察しかねますが、両親をはじめとする親族、知人、友人らの(家庭やコミュニティーでの)期待がきわめて大きいようです。即ち出家生活を経験して初めて一人前の社会人として認められる彼らこそはタイ国の理想的臣民として明日のタイ・サンガを物心両面から支え、ひいては国家社会の繁栄発展と安泰に寄与する中心人物となるからではないでしょうか。現在のタイ国は政治経済の面で多くの難題をかかえていることは事実ですが、多くの若者が多大な時間と費用の犠牲のもとに一時期を僧伽へ身を投じて修行にいそしむということは形どおりの説明ではすまされないものがあると思います。東南アジアの発展と安定のためにはタイ国の果す役割が今後益々重要なものとなってきておりますが、二十一世紀の仏教の姿・将来像が如何様なものとなるか興味あるところであります。

こちらでの行持面についてですが、毎日唱えられて

いる朝晩課のなかで初めの方の部分に仏の崇高なる十徳を讃える箇所があります。この部分は他の経文の中にも多く出てきますが、こちらの朝課に含まれるものを漢訳したものが、中国総合仏教の伝統をひく黄檗山萬福寺の晩課念経のなかにも出てまいります。江戸時代にくらべると簡略化されていますが、現今においては陰暦の新・満月に相当する朔旦（初一日）と望旦（十五日）の両日に祝聖の儀が執りおこなわれます。その前日、即ち毎月十四日と晦日に行われる羯磨（けもう）晩課と称するものの中に含まれております。それは禮佛懺悔文（三十五・五十三佛名懺悔経）と言うもので、やはり初めの方の部分で三十五佛名が始まる前に仏の十徳に相当するものが出てきます。漢訳では――南無如来（一）應供（二）正遍知（三）明行足（四）善逝（五）世間解（六）無上士（七）調御丈夫（八）天人師（九）佛（十）世尊――であります。それがこちら（ビルマ、スリランカ、バングラデッシュ、ネパール等も同様）の朝課の――ナモー・タッサ・パカワトー・アラハトー・サムマーサムプッタッサ（三唱）――のあとに続く部分がこれに相当します。即ち――ヨーソー・タターカート（如来）・アラハム（應供＝阿羅漢）・サムマーサムプッタッサ（正遍知＝正自覚者）・ウイッヂャチャラナサムパンノー（明行足＝明行具足）・スカトー（善逝＝修伽陀）・ローカウィドゥ（世間解）・アヌッタローー（無上士）・プリサタムマサーラッティ（調御丈夫）・サッターデーワマヌッサーナム（天人師）・プットー（佛）・パカワー（世尊＝婆伽梵＝薄伽梵）――以上の部分であります。黄檗山では羯磨（けもう）がある日は禅堂雲水にとっては把針灸治となります。黄檗における法式や梵唄（ぼんばい）様式明朝時代のものを引継いでおります。経の中国本土はもとより台湾・香港・タイ・シンガポール等々の中国寺院でも同様の梵唄法式を見ることが出来ます。事実バンコク市内の〝ヤーワラー〟と呼ばれるチャイナ・タウンにある龍蓮禅寺で行われている晩課の蒙山施食儀の部分は、昨年来訪中時に福建省尼僧仏学院が併設されている崇福禅寺で見たものと

同一であります。八月頃のバンコク市内では、よく赤紙に普度とか、普度孤魂（施孤陰魂）勝會また孟蘭勝會などと書いた貼紙を目にすることが出きます。日取りは大体農暦（旧）の七月中が多いようです。バンコク市内で代表的中国寺院である龍蓮禅寺と普門報恩寺の施餓鬼を見ましたが、使用テキストは〝瑜伽焔口施食壇儀〟というもので日本、中国本土とも共通のものです。法要自体も全くと言ってよいほど同じでありました。純然たるお寺以外にも無数にある廟宇、たとえば関聖帝君廟、天后聖母廟、道教廟など、その他大勢の寺廟においても同様に施餓鬼行事が信者さんたちによって行われているようです。

こちらタイでは一ヶ月に約四回のワン・プラという仏日があります。（ワン・プラのプラはパーリ語のすぐれた、高貴なるという意味のワラからきています。タイでは仏様、仏像、僧名、国王、神様、太陽、お月様等聖なるものの名称に冠するプリーフィクス＝接頭辞の一つです。）ワン・プラは陰暦使用時代に月の満ちかけによって出来た節目となる日でした。それは新月満月と二回の半月の日であります。毎日東から登ってくる旭日を拝むことは感動的であると言えます。太陽あっての我々の存在であることを考えてみるならば、その恩恵たるや計りしれないものがあります。一方、三十回相当の太陽を拝む日数を要して一度満月となられるお月様の存在は、夜空にきらめく幾多の星の中でも神秘的かつ一番身近なものであります。潮の干満などの天地自然のリズムを司ったり、宇宙生命の分身である我々人類の生存に必要な制御を施したりするのは、無言の説法、大慈悲心の発露と言えるでしょう。〝おのが目の力で見ると思ふなよ月の光で月を見るなり〟と道歌にありますが、やはり夜陰にあっては最も崇高なるものとして畏敬すべき対象ではなかったかと思います。ワン・プラの日には、一般在家者は仏法僧の三宝に帰依することによって托鉢僧に供養したり、午前中ワットでの在家説戒に参加して仏戒を唱え、授かり、遵守するのがならわしです。ですから伝統的価値観で

あるタン・ブン行為を果す絶好のチャンスとなり、祭日や週末とワン・プラが重なったりしますと、ワットは参拝者で大変な人手となります。

新・満月の両日午後、ワットの布薩堂では布薩式（二二七条の具定戒＝パーティモックの誦出）が比丘全員参加のもとに行われます。かようにワン・プラの日は比丘のみならず仏法僧を依りどころとする在家信者にあっても戒律遵守の上できわめて重要な節目であると言えます。

在家戒と言えば、パンチャ・シーラ（五戒）が基本となりますが、ワン・プラ当日に授かるのは〝ウポサタ・シーラ〟と言って八斎戒であります。この日は文字どおり精進日となりますので、（一）不殺生戒により蟻や蚊一匹の生命をも尊重し無益な殺生をしない、（二）不飲酒戒により放逸の原因になりがちなお酒を売らない・買わない・飲まないとなり、（三）非時食戒により午後の食事を断食するかたちとなります。他に（四）不妄語、（五）不邪淫、（六）不偷盗の各戒、それに（七）歌舞音曲、観劇、装飾、化粧を控える戒と（八）一ハッタ（約65㎝）以上高くて立派な寝床を使わない戒があります。

比丘にとっての持戒ですが、制度的には月二回の布薩式があり、接するたび感銘深いものがあります。比丘の生活が衆目監視のもとに行じられる国柄ですから大勢の人々によって励まされることも事実です。ブッダの教法宣布という点に関しては国全体として取りくまれており、仏国土出現のために永続的努力が払われていると言えます。